

■ リピーターを増やす学校図書館 ～利用者層を広げるために～ ■

(岡山県立津山工業高等学校 司書 古谷祐子)

(岡山県立津山高等学校 司書 細田優子)

◇発表内容◇

一見図書館が利用されているように見える学校でも、不読者は確実に存在する。図書館サービスを充実させているつもりでも、実際には「図書館をよく利用する一部の生徒にしか還元できていない」というのが、多くの学校で見られる図書館の現状ではないだろうか。

では、このような学校図書館の現状からどうすれば脱却できるのか？この分科会では、不読者を図書館に呼び込むことと図書館の利用者層を広げること、に重点を置いて行ってきた美作地区司書部会の研修から、各校の実践を含めた取り組みについての報告がなされた。具体的には、国語の授業時での「10分間読書」の導入、「ブックリストの作成」、「ミニ読書マラソン」、「ポスターや帯の作成」、「ケータイサイトでの情報提供」などが紹介された。

◇質疑応答◇

Q. 勝山高校の朝読書は、どのようなものなのか？（授業と連携している？）また、津山工業高校で現在行っている国語の授業時の10分間読書を、ぜひきちんとした朝読として全校で行ってほしい。

A. 勝山高校：毎朝、始業時間の前の10分間、担任の先生と一緒に読書をする。

津山工業高校：国語の授業の中でもある先生による一部の取り組み。朝読については、生徒の通学の便が悪く、朝時間が取れない等学校の諸事情により現在のところ不可能。今後も難しいと思われる。

Q. 勝山高校でのLHRでのブックトークは、司書が行っているのか？また、情報の連続配信のところで説明のあった図書館便りについては、全校に配布しているのか？

A. 勝山高校：ブックトークは、生徒が行っている。

津山東高校：図書館だより波状攻撃→全校生徒・先生に配布している。6月の1ヶ月間は毎週作成、配布した。

勝山高校：時事問題関係記事→月1回作成し、生徒・先生へ配布している。

Q. 津山工業高校と津山高校について、それぞれ電算化されているか？不読者の数字はどうやって出したのか？

A. 津山工業高校：今年度4月から稼働。不読者数は手作業で出した。

Q. 発表では不読者の割合が63%だったが、最終的には何%になったのか？

A. 津山工業高校：取り組み以前は90%に近い数字だった。今回、この取り組みをすることでようやく63%になった。約半数の生徒が利用するようになった、というのが結果。

Q. 小学校での不読者についてはどうか？

A. 岡山市立横井小学校：小学校は図書の時間が週1回必ずあるので、ほぼ全校生徒が本を借りている。このような時間が確保できるのはとても大きなことだと思いつつ同時に、それが10分間読書という形でしか続かないということが少し悲しくも思う。小学校ではあ

れだけ本を借りている子どもたちが、高校では、約半数の子どもたちが本から離れていくというのは少しつらいという気がした。しかし、小中でかなり本を読んでいる子どもたちは、本に対する苦手意識は少ないと思われる。小中高とそれぞれの段階で、司書が、子どもの近くに本を置くような取り組みをすることによって、生涯本と親しめるような子どもが育つのではないかという期待感も持っている。

Q. 「読書マラソン」について、小中で取り組みをされている学校があれば聞きたい。

A. 玉島高校：期間限定でスランプリーを行った。スタンプがたまったら、クジを引いて、当たったら景品を出している。景品は、新潮社のヨンダグッズなど。昨年も実施したが、今年度もわりと反響はあったようだ。

Q. どうすれば貸出冊数が伸びるのか、その秘訣を、県内の高校で、最も貸出冊数の多い倉敷中央高校の方からアドバイスいただきたい。

A. 元倉敷中央高校(現水島工業高校)：

校舎と校舎の間にある渡り廊下のような図書館だったので、逆にそれを活かすようにした → 歩いていても気を引くように、本の表紙が見えるように並べた。その他、①なかなか借りられない分類の本の貸出を底上げする。具体的には、数学・科学・6類などからおもしろい本をピックアップして紹介。②各クラスの貸出ランキングを発表する。③1万冊までカウントダウンをし、記念すべき1万冊目を借りた人には景品を出すなど、お祭りっぽく盛り上げる、など。

Q. リストを共有しているということだが、どのようにしているのか？

A. 津山高校：エクセルのデータを交換して共有している。

Q. 今の話の関連から、司書部会で立ち上げているHPを利用し、それぞれが作成したリストなどのデータを一括管理し、誰もが自由に利用することはできないのか？

A. 担当(倉敷商業)：もちろんOK。出すことについては問題なし。

◇意見・感想◇

今回の発表は大変勉強になった。不読者の分析が的確で、生徒の図書館利用実態を4段階に分けていたのも、実際に生徒に接している者として、とても納得できるものだった。この分析に基づいてやれば、どこの学校でも応用できるのではないか。これまで、不読者への取り組みについては漠然としたものだったが、この発表のお陰で、生徒の状況を客観的に把握でき、読書への手だてが具体的にイメージできるようになったのではないか。